

手紙文・説明文の指導

総合学習の実践報告

石川 承 紀

はじめに

日常生活の中で最も多く書かれるのは手紙と日記の文章であろう。日記の場合は、一応他人に読まれることを意識せずに書くと考えられるから、日常の「伝達」のための文章としては手紙文をその代表として考えることができる。電話が普及したことによって、手紙を書く機会は減ったと言われるが、それでもなお、相手にきちんと連絡する場合などに手紙は重要な役割を果たしている。しかも、——これは本稿で扱うことではないが——電話での上手な話し方や礼儀正しい言葉遣いの基礎的な知識や心構えは、手紙の書き方の学習によって培うことができると考えられる。つまり、手紙の書き方を身につけることによって、日常生活の中で文章によるコミュニケーションを円滑に行うことができるようになると同時に、日常の「伝達」全体に関わる基本的な能力を身につけることができると考えられる。特に口語の敬語の用法に習熟するための場として、手紙文は他の分野の文章に換え難い重要な意味を持っている。

また、最近特に、実社会で活躍している多くの人々が、適切な手紙の書き方を身につけたいと望んでいるように思える。そのことは、「手紙の書き方」という類の書物が数十種類も出版され、しか

も、その多くが順調に版を重ねているのを見ても、了解される。ところが、現在、高等学校では手紙の書き方の指導はほとんど行われていない。小学校・中学校では、一応の実作指導がなされているが、高等学校以上になると、作家の手紙文を文学作品として鑑賞する程度であって、実作はほとんど指導されないようである。その結果、「高等学校を出ても手紙一本満足に書けない。最近の国語の指導はどのようになっていくのか」などと年配の人達の批難を浴びている。やはり、手紙文の実作指導は、生徒の学習の発達段階にに応じて、何度も行わなければならないものであろう。

本稿は「伝達」の文章に習熟することをねらいとして、「説明的文章の読解」から「伝達の文章の実作」に至る指導の報告である。年間の「表現」の学習の中では、「生活感想文の指導」「読書感想文の指導」などのあとを受けて第三学期に行われたものである。学習の方法は、教科書本文の読解から、他の学習法へと及ぶ「総合学習」である。総合学習についての説明と、それに必然的に関わる年間指導課程については、次に記す。

また、本稿は総合学習の一環であるということから、次の二つの拙稿に続くものである。

☆「作文指導 そのⅡ」(大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎研

究集録第二十集)

☆「文章を楽しく書くようになるために」

―総合学習とフィクション―(高等学校における 表現指導の理論と実践 大矢武師 瀬戸仁編 明治書院)

総合学習

「総合学習」については他稿に述べたので略述する。

本学習法は、教材となる中心の作品に関連する各分野の文章を組み合わせることで、学習の方法を組み合わせることで、学習の効果を総合的に高めてゆこうとするものである。芥川龍之介の「羅生門」の学習を例に挙げると次の様になる。

指導者の準備する文章

。「芥川龍之介」吉田精一(評論)

。レポート「羅生門」(生徒作品)

。感想文「羅生門」「地獄変」他。(全国読書感想文コンクール優秀作品より)

これらの中から、その時の「羅生門」の指導計画に必要な文章をプリントして生徒に渡す。五十四年度は感想文の指導との組み合わせを考えたので、「羅生門」を含む三作品についての感想文を生徒に渡した。

指導の方法としては、読解のための「課題ノートの整理、提出、点検」・「教室での授業」「読書感想文の例を読んで批評する」「読書感想文の書き方の指導」の組み合わせである。読書感想文の実践は夏休みの課題とした。

総合学習は最も平凡な学習法であり、誰もが似たような指導を行っているものである。平凡ではあるが、学習効果は高く、特に、小説の読解と、その小説についての評論の読解などを組み合わせてみると、生徒は興味を持ち、内容の理解も深くなるようである。ただ、生徒にプリントを配布することも多く、文章を書かせる機会も増えてくるので、課題の傾向が偏らないように、年間の指導全体の流れをしっかりと把握しておかねばならない。

昭和五十四年度「現代国語」一年生(二単位)「表現」に関わる指導の概要(読解中心の教材は省いた)

△単は単元名、○は教材名、☆(△)は表現指導と処理
教科書 高等学校 新編現代国語1

改訂版 旺文社

一学期

(単)自己の発見(評論・随想的文章を含む)

。おとぎ話とSFの間……黒井千次

☆要旨を原稿用紙に二百字以内でまとめ提出させる。

(検印・代表的な数例の読み上げと批評)

(単)小説 (一)

。羅生門……芥川龍之介

(総合学習の部分に記した)

☆課題作文「文化祭のこと」

(六月に文化祭があり、八百字程度の随想風の文章を書くよう求めた。添削し、寸評を書いて返した)

☆この時期から「私の勉める一冊の本」と題する五十分程度

の話を時間を各授業の初めに設けて出席番号順に話させた。

クラスによつて熱意・内容に大きな差ができ、途中で立ち消えになったクラスもあった。

夏休み

読書感想文(四百字×五枚以内)

読書ノート(読書メモ 三作品分以上)

一学期

(単) 随想

。なまけもの論……北杜夫

☆要旨を二百字以内でまとめる。(一学期と同じ)

。近江の琴糸……水上勉

☆課題作文「このごろ考えること」

(随想・八百字程度・添削し、寸評を書いて返却。よいものを教室で読む)

三学期

(単) 文章の世界

。歩哨の眼について……大岡昇平

☆次節に詳述する。

(単) 心の記録

。詩人の手紙……立原道造

☆次節に詳述する。

(単) 論説・評論

。伝統芸能とテレビ……加藤秀俊

☆要旨を二百字程度にまとめる。

(検印・返却。要旨とは何かを述べた文章と、要旨の例文をプリントして配布)

以上の年間の指導の流れは、年度の初めに計画し決定したのではない。同じ学年を担当する三人が相談し、大きくは教科書の順序に従いながらも、教材の難易等によつて前後を変更した。従つて、表現の指導の流れも、年度初めに年間計画を決定したのではなく、その都度、前後のことを考へて決定した。五十四年度一年間の表現に関わる指導の要をまとめると次のようになる。

。要旨をまとめる(評論・随想的文章)

各学期一回 三回

。課題作文(随想的文章・生活感想文)

二回

。読書感想文

一回

。読書ノート

二回

。手紙・説明文

一回

◎「私の勉める一冊の本」

各授業の初めの五十分間の話。

評価について

読書感想文については、二学期の中間考査の十百分相当として扱った。あとの文章については、その都度、文章の最後に短評を加えて評価とし、点数換算はしなかった。要旨については検印のみである。

何度か提出しなかった者については、年度末に五〜三点を減した。

説明文と手紙文

三学期の主要な教材の一つとして、大岡昇平の「歩哨の眼について」(時間配当四時間)を選んだ。その一部分に、ミンドロ島サンホセの兵舎周辺についての、きわめて精密な描写がある。(本稿末の(八参考)に採録)この部分がきちんと読解できているか否かを確認するために、この文章の表す場面を図に描かせた。全員のノートを集めてみると、距離の表示や、遠景の山容について誤りが多い。

「読解」したことを自分なりに「表現」してみると、読解の不十分な点が露呈されたのである。表現によって理解を確認することのできる一つの例である。

教科書のこの部分の表現に倣って、説明的な要素を含む「伝達」の文章の練習をすることにした。ところが、三学期の終り近くになっているので、「説明文」と「手紙文」の両者の読解と実作に十分な時間を設けることができない。そこで、「歩哨の眼について」と「詩人の手紙」(手紙文の教材)とを関連させ、『伝達』の文章の読解と実作を三学期の学習全体を統一する目標とした。立原道造の手紙文について文章を鑑賞するという要素は切り離した訳である。具体的な学習については、次のような便法をとった。

。前記のように、「歩哨の眼について」の図は全員が提出する。

(図を描くのは家庭学習)

。「詩人の手紙」を全員が読んでおく。(家庭学習)

。「国語便覧」を使って、手紙の基本的な形式についての授業を

する。(一時間)

。実作(家庭学習)は、二つのグループに分けた。全員に共通するのは「大手前高等学校について、本校を知らない人に伝達する文章を書く」ことである。また、「相互批評の学習」をすることを予告した。グループ毎の学習内容は次の通りである。

1 説明文そのものを描く。「歩哨の眼について」の(八参考)に挙げた部分をまねて「文章で正確な図を描く」ことを目標とする。

2 手紙文を書く場合には、中心となるものを次の三つから選ぶことにした。

・ 大手前高等学校の位置、内部の建物の配置。(1と同じくらい)

・ 年間行事等の学校生活

・ 学校の位置、行事等を含む大手前高等学校の特徴。

各自が書いてきた作品を一度指導者が集め、記録を取って生徒の手に返し、一時間を設けて相互批評する。加筆すべきことは次の通りである。

1 誤字・脱字等を訂正する。(消しゴムは使用しない)

2 最低一箇所は、「自分ならこう書く」という工夫を書き加える。

(加筆させるについては、友人の文章で勉強させてもらっているという気持を忘れないように注意した)

相互批評は、一時限の授業全部をこれにあてたので、三、四人分の文章を読むことができる。そこで、説明文、手紙文のそれぞれの

文章にふれることができるようにした。

以上の学習は、本来ならば、二ないし三段階に分け、時間も十分に掛けて指導したい内容であった。本年度の教材でいうと「羅生門」(時間配当六時間)に相当する時間が欲しいところである。しかし、週二時間の現代国語の授業で、常に十分な時間数を取ることができずはない。授業時数の不足を補うためにも、教材と指導法の総合化を行わざるを得ないのである。

原稿用紙

原稿用紙は、文体別に二種使った。説明文については、構想メモの枠を設けた四百字詰原稿用紙を用いた。手紙文については、便箋の形をした用紙をプリントし配布した。これの一部分に「構想メモ」「封筒の表書き、裏書き(現寸大)」を記させた。

説明文の例

生徒作品 1 男子 M (本稿末に採録)

生徒作品 1 については、「Eの文字を上を南に向けて横たえたようなもの」の部分に再考せよの印がついている。また、「プールはどこ?講堂がない!!体育館は?」と注意書きがある。

全体としては多少の欠点はあっても、教科書の説明的文章をよくまねた作品である。

生徒作品 2 女子 S (本稿末に採録)

作品 2 は、位置関係の描き方、全体のとらえ方がすぐれている。説明文の一つの好例であろう。

生徒作品 3 女子 K

作品 1・2 が完成度の高いものであるのに対して、3 は標準的な作品である。本文と加筆部分の全部を次に記す。行間の() が加筆部分である。加筆は主なものだけを記した。

正面にはかの有名な大阪城、隣には府庁という大阪の中心部に我が大手前高校がある。

大きくくりっぱな建物の中にひとつだけひっそりといも虫のように立っている。

校門から運動場へ出るまでに少し時間がかかる。それは広いのでは() (を)しているからである。() (ます)(に)(ると)

なく、迷路のようにややこしい造りなのである。門を入れて暗い(間を通り抜ける) (さらに)

げた箱のところを^①通って食堂の横からテニスコートの横を^②通ってや^③つと運動場へたどりつくのである。

しかし、もつとびっくりすることがある。それは、校舎がU字型(であることだ) (になる) (く)

なのだ。私は入学してもうすぐ一年だというのに今だに迷うことがある。ほんとうに迷路の中にいるようだ。

それに、その凹字型の校舎の中で、一室だけ飛びだしている教室があり、そこはなんと三面が窓なのである。名づけて、金魚ばち。ものすごく光が入ってまぶしい教室である。

それともうひとつ、廊下や階段が板張りで、私たちはそれをどうぐいす張り。と呼んでいる。その名の通り、歩くとうぐいすが鳴く

ような音がするのである。(中略)

こんな古い学校には問題点がたくさんあるが、特に学校生活の中で困ることは、トイレが少ないことと、机といすがつながっている(特に、後者は)

ことである。これは立つことにいすを動かすとうるさいので勉強のうえにじまになるからだと思うが、そうじのときにとても不便なのである。

こういう問題点をたくさんかえた大手前高校の中で、私たちは元氣よく毎日を送っているのである。

生徒作品 4 女子 T (本稿末に採録)

指導者の説明の一部分だけを聞いて、自分の世界を造ってしまいう生徒達がいる。しかもそれは、作文の特に得意な生徒と、不得意な生徒の両極端に分かれる。△生徒作品 4 V のような作品は、「正確な説明」を目的とする文章の枠からはみ出すものである。「目的に応じた文章」を書く指導をする場合によく見出す例である。一つ一つの文に正確さを要求されることが苦手な生徒については、細かい部分の指導はやめて、規制のゆるやかな手紙文に書き改めることを指示した。

手紙文の指導

手紙文については、伝えるべき内容についての制限を緩めた。そのかわり、手紙の形式をきちんと守らせることにした。つまり、「友人同士や親兄弟の間の気楽な手紙ではなく」「きちんと挨拶すべき

相手」であって、「大手前高等学校を知らない人」に宛てて書くことにした。文章の内容については、必ずしも、校舎の正確な長さや位置を書かなくてもよいことにした。あまりにも繁雑な説明は初心者の手紙文になじまないからである。

△生徒作品 5 女子 G V
(校正加筆した部分は略す)

構想メモ

。うぐいす張りのこと。大阪城を利用していること、出席番号は女子が先であることを具体的に説明する。
。文化祭に来てくださいと結ぶ。

封	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
5.5.1 甲	兵庫県西宮市東町三一八 中山 美 岐 様
大阪市大正区三軒屋西 二一九一十七 後藤田 珠 美	

拝啓 きびしい寒さが続いておりますが、皆様お変わりございませんか。私の方は家族みな相変わらず元気なやっております。

さて、今日は、私の学ぶ大阪府立大手前高等学校のことを貴方にお伝えしようとペンをとった次第です。大手前高校は名前から察せられるとおり、大阪城の大手門の前に位置し、男女約一五〇〇人が学ぶ学校です。

私はあまり他校のことを知りませんので、他校と大手前を比較することはできませんが、二・三、大手前の特徴的なことを挙げさせていただきます。

もし貴女が本校に御来校くだされば、まず、廊下へ一歩ふみだした時から、妙な音楽につきまとわれるでしょう。

キンキン、カタカタ、クイクイキュキュ、ガクガク、ゴトゴトと言いますのは、校舎が老朽化し、板張りの廊下は、歩くごとにひどくきしむのです。というより、もうそれを通り越して「奏でる」と言った方がいいでしょう。これを人は「うぐいす張り廊下」と呼び、大手前名物の一つに数えられると思います。大勢で歩いている時は、その音もべつに気にならないのですが、一人で歩くとその音に我が体重を思い知らされるようで、やはり廊下はコンクリート固めの方がいいですね。ちなみに本校でも「新館」と称する、そう新しくもない校舎では、うぐいす張りではなく、一般的な学校の廊下です。

次に、近くに大阪城公園という場所があるのは便利なもので、大いに利用しています。運動系クラブでは、その傾斜地——一般に坂という——や階段を使ってトレーニングしています。登山部では、み

ごと、ほぼ九〇度傾斜の石垣をのぼったとか。もちろん体育の授業でも遠征して行きます。中でも、二月に行われるマラソン大会は、恒例の行事です。これは、体育の授業として、一・二年生の全員が大阪城の濠に沿ってマラソンするのです。一周三キロメートル弱。女子は一周、男子は二周走ります。砂利道や坂道、はたまた並木道などもあって、運動場を走るのとは全く感じがちがいます。これもまた、大手前ならではのことだと思えます。

先ほど、普通なら「男子は一周、女子は一周」と書くべきところを、あえて女子を先に書きました。大手前にはそういう習慣があるのです。出席番号は女子が先です。なぜなのか知りませんが、レディファーストなんて気の利いたモンではないでしょう。多分、旧制の高等女学校時代の名残ではないかしらと勝手に憶測しています。

我が校について、少しなりともわかっていただけただしょうか。もつとうまく説明できればいいのですが、もしよろしければ、今年の文化祭にでも御来校くださればいろいろわかっていただけると思えます。

二月十日 後藤田 珠美

中山美岐様

右の文は、手紙文の一応の代表である。加筆は十箇所程あった。例えば「これもまた大手前ならではのことができることだと思えます」という表現や、文末を「かしこ」で結んであった部分。また「貴方」のつもりで「遺方」と書いてあった部分が訂正されていた。指導者が加筆した部分は原文のままとした。

以下に構想メモの例だけを挙げる。

△生徒作品 6 女子 H V

構想メモ

前文

- ①書き出しのことは〓拝啓
- ②時候のあいさつ〓きびしい寒さが続いております。
- ③安否のあいさつ

相手〓先生には……ますか。

自分〓たいへん……通っております。

正文

- ④正文の書き出し〓さて
- ⑤主体部分〓この前のお手紙……なりたいと思います。
- ⑥結びのあいさつ〓先生がいつでも……いたしております。
- ⑦結びのことは〓かしこ

後

- ⑧日づけ〓二月十日
- ⑨署名〓〇〇〇〇
- ⑩あて名〓山下富美子
- ⑪敬称〓先生
- ⑫脇づけ〓〓〓〓

右の構想メモは、一見すると整っているようでいて、「構想メモの指導・入門期」にありがちな問題を多く持っている。

第一に、このメモは、手紙の本文を書き終えてから作ったものであることが分る。

第二に、本稿では略した手紙の本文と照らし合わせてみると、本文の方では、「拝復……かしこ」になっていた。もちろん、相手へ

の返信ではない。

構想メモについては今年度七回目の指導である。手紙の形式については、一時間だけの指導であったが、これ以上の時間を割くことはできない。限られた時間の中で、このような間違いを根絶することは、極めて難しい。

指導に要した時間数は、総合学習の形をとったので明確にはしにくい。一応の時間を挙げて次の通りである。

「歩哨の眼について」 五時間

詩人の手紙 家庭学習 一時間

手紙の形式について 家庭学習 一時間

文章執筆 家庭学習 一時間

相互校正 一時間

ちなみに、生徒作品を私が読んで短評を入れると、一クラス約三時間かかる。現代国語を四クラス担当すると、放課後の時間はほとんどなくなってしまう。生徒の相互校正の能力をたかめる方法を検討したいと考えている。

指導上の諸問題と今後の課題

校舎の配置などを文章だけで説明するということは、案外難しいものである。全体の大体の形を説明すること、その中の細かい部分部分の関わりを述べることとのバランスがうまくとれないようである。このような文章を相互校正の形で学習させたことには意味があった。つまり、毎日自分が生活している場について述べている

ために、簡単な説明でも分かってくれるだろうという思い込みがある。それを友人から「このような誤解が生ずるおそれがある」と指摘されて、初めて自分の文章の至らなさに気付く。また、他人の目で自分の文章を読みなおしてみても、「このように書けば分かってくれるはずだ」と思っていたことが錯覚であることに気付くのである。

「相互校正」の学習法はプライベートについて注意すべき点があるが、実際に何度か指導してみて「正しい伝達」を指導するために優れた方法であることが確認できた。

手紙文の実作については、国語敬語法を系統的に指導した上で、もう一度指導したい。その時は、手紙を出す目的別のグループを組んでみたいと考えている。

形式、内容ともに優れた模範的な手紙文はないかと、作家の手紙文など五百余通にあたってみたが、いわゆる「手紙の形式」通りのものは少ない。日本の作家のもので、形式が整っているのは、弔問と見舞いの手紙だけであった。外国の作家達の手紙が、皆きちんとした書式にのっとって書かれているのに対し、日本の、文章の先達の手紙にそのような文章が少ないのは奇妙なことである。優れた手紙文として取りあげられているものが、親しい仲間うちのやりとりばかりであるからだろうか。ともあれ、そのような人達も、基本的な書式を身につけていることは間違いないことである。きちんとした礼儀に適った書式を覚え、その後で形式をくずしても書けるように生徒達を指導してゆきたい。

本稿に述べたような、二つ以上の教材、目標を持つ学習法は、一般には、生徒の学習に対する焦点が定まりにくく、指導者の意図を生徒に明確に伝えることが難しい。本指導においても、説明的文章と手紙文との指導を「伝達」という枠で一括することには、指導者の方でためらいとこだわりを持っていった。しかし、実施してみると、一応予想していたように生徒の表現意識という点では、説明文と手紙文とは一つのレールの前と後の関係であって、生徒の側にとまどいはなかった。共通の目標と異なる文体とで実作したグループに相互校正させると、全員が同種の文章を書いた場合よりもお互いにきびしい批評、添削を加えることができて面白い授業となった。

表現の各分野の指導については、すでに完成していると思われる分類にこだわらず、生徒の表現意識や学習効果という面から再編成してみたい。読解学習との関連についても、そのような方面から総合化の柱となるものを探ってみたいと考える。そのような模索が、現在でも少ない授業時数、五十七年度からはさらに減少すると考えられる国語の授業に対応し、指導を充実させてゆく一つの方法だと考える。

〈参考〉

△歩哨の眼について 生徒に図示させた部分▽

私の駐屯したミンドロ島サンホセの兵舎の前面は、一キロ先の林際まで野が開けていた。一部気まぐれに稲が植えてある所もあ

るが、たいていは荒れた湿原で、そここの水たまりに水牛がも
の憂く水を浴びているだけであつた。

左側は、やしの並木道で縁取られている。兵舎前面に沿つた道
は、五十メートル左の兵舎敷地が尽きる所で、その並木道と十字
に交わり、さらに五十メートル行つて林に入つてしまふ。

右方はこれも約五十メートルで、道が一つの濁つた小川を木橋
で越えると、サンホセの町になる。亭々たるアカシアの立ち並ん
だ間に、くすんだ民家や砂糖会社住宅の赤屋根が川沿いに点綴し
て、正面の林際に至っている。

このほぼ幅百五十メートル縦一キロの矩形の地面を、歩哨が見
張っているわけである。

正面林の後ろは、木のない丘がゴルフ・リンクのような淡い整
然たる緑を連ね、その上に我々が「鋸山」と呼んでいた岩山が頭
を出し、さらに遠くは標高二千メートルの中央山脈の山々が高く
青くかすんでいる。

△生徒作品 1 説明文 男子 M V

(構想メモ)

正門↓入口↓理科棟横↓別館横↓(生活圏) ※理科棟……本館

(距離は気にしない)

本文

大手前高校の正門は東側の道路に面している。門を入つた所に小
さな築山があり、そのすぐ奥が本館の入り口である。但し、この入
り口は生徒の通行は禁止。そのため生徒は、そこより十メートル程

南にある入り口を利用する。校舎に入った所は、げた箱があり、そ
の南側が柔道場である。そこから西へ向つて五メートル、突き当つ
た右側には、本館一階の廊下が伸び左側には、給品部がある。給品
部の所から更に西へ二十メートル、その間最初の十メートルは右手
に本館左手に理科棟と二つの校舎にはさまれた谷底のような通路後
の十メートルは別館を左に見ながら右側にテニスコートの見える渡
り廊下になつている。廊下の尽きた所に新館がある。新館は、南北
方向に十メートル程の二階建の建物で、その二階に一年三組の教室
がある。

一気に入新館まで来てしまつたが、途中にあつたものを振り返ると
……

別館。これは、渡り廊下の途中に東西方向に横たわつている二階
建の校舎。今二年生の一部が使っている。理科棟。四階建のワリア
イ新しい建物。その名の通り、生物、化学、物理の各実験室・講義室
がある。そして一階はなぜか食堂。本館、さすがに本館と言うた
けある。形はというと、アルファベットのEの文字を、上を南に向
けて横たえたようなもの。その南北に通る長い廊下の中央部に最初
に言つた生徒通行禁止の正面玄関がある。又、その廊下の南端が、
これも前に出てきた給品部である。本館は三階建、一階が校長室、教
務室、事務室他で、二・三階に教室がある。本館の西側の囲まれた
部分には中庭になつている。又、男子更衣室もそこにある。本館の北
側には、金蘭会館なる建物がある。ここには図書室などもある。金
蘭会館の北西側には対角線で百メートル取れる運動場が広がつてい
る。又、新館(注・一枚目)の西側には体育館もある。たいした学

校だ。

△生徒作品 2 説明文 女子 S V

(構想メモ) 校正者 松永(加筆部分 略)

- 一 学校の位置・外部環境・外観
- 二 周辺部の建物との関係(東↓南↓西↓北)
- 三 学校の内部環境(校舎の配置とこれからの変化)

本文

我が大手前高校は、上町台地の北 大阪城の北西の角に近い所に位置する。この辺りは府の庁舎が立ち並ぶ官庁街で、学校は、正門のある東側を除くと、その周囲すべてがビルにとり囲まれている。学校は狭く、その形も複雑で、いわば北側と東側につき出したかぎのような形になっている。東の正門は、道一つを隔てて大阪城に向かっていて。正門前の道は、南に向かって上がっていく坂道であり、我が校の扉は、この坂道と五十m程接し、西に入る。学校の南側は、大阪府庁の本館で、府庁は学校と非常に接近して立っている。学校の南側は、約一五〇mである。西側は狭い道に面している。その向かいには、法務局などの高いビルが立ち並ぶ。かぎ形の北側につき出した部分にあたる運動場は、その西側と北側が道路で、西は、この狭い道であるが、北は大阪城の北側を走ってくる道路で、向かい側は府の合同庁舎である。運動場は、これらの道路より1m程高くなっている。運動場の東側、即ち、合同庁舎前の道路と、正門前の坂道に囲まれた部分は、建物が入り組み、運動場のすぐ東側が大手前女子短大、そのさらに東、坂道に面して国民会館、

日本赤十字社などが並んでいる。

このように、建物の間に押し込まれたような我が校は、その内部も、校舎が複雑に入り組んでいる。正門を入ると本館、左側に講堂、理科棟、別館が並び、奥は体育館、その手前に新館及びプールがある。本館はコの字のような形で、その内側が中庭、中庭の前がテニスコートである。本館の北側裏には、同窓生の建てた金蘭会館がある。しかし最近では、学級増に伴う教室不足、あるいは、建物の老朽化などから、工事が次々に行なわれている。近いうちに現在のテニスコートに新しい体育館ができ、その結果、伝統ある中庭が姿を消すこととなる。今、大手前は、長い間保ち続けてきたその装いを大きく変えようとしている。

△生徒作品 4 女子 TV

校正略。指導者の課題から離れやすい例。作文の上手な生徒。

本文

この間、美術部の部屋で素敵なものを見つけた。N氏の画集である。山はどっしりと大地に構え、滝からごうごうと水が流れ、細く鋭い木の枝に飛沫が跳ねあがり、そしてそれらがすっぽりと雄々しい熱い息で包まれている。そのN氏が大手前出身だと知って私は初めて、N氏が勉強したり、絵を描いたりしたであろうこの教室や、廊下に魅力を感じた。

私は実際、入学して、一年経とうとしている今でも、どこに何があったというのをはっきり知らないし、(なにしろ、陽のあたらない陰鬱な教室や、その白々しくクロームグリーンに塗られた壁をいっいち敷えるのがいやなのである。)唯一好きな場所である

中庭も、つぶされるのを待つだけの今となつては、変に寒々しく感じられるばかりである。

しかし、この憂鬱な空気の中にどんな人間が生活しているのかは、私が一言でいえるものでもないだろう。ただ皆、100%まではいなくなるとも十分、自分の好き勝手をやっていると思うのだ。勉強しようが遊ぼうが、どうぞお好きなようにといった風がある。他人の事に無関心だといえ、それでおしまいが、何とも気楽ではないか。そして、そういう中であつて、興味深い様々な人間が生活しているのである。先に書いたN氏という素敵な画家がいる。

図書館の奥の棚で、もう何年も読まれていないような本を開くと、赤鉛筆が引かれた行に自分に似た昔の生徒と出会う。校門の傍らにポツンと咲いていたゆりの花の匂いを誰かがかいでいた。そのように日影のゆりに気づいて見つめる人がいる。文化祭の日の夕方、使った金魚を中庭の池に放して満足そうに帰って行く人もいる。そのあとに、ブカブカ浮かんだ金魚の白い腹をみつめて動かない人もいる。

大手前生は、暗い、などと言われるみたいだが、あれはびったりしない表現だと思ふ。猫背で、頭をうつむきかげんに歩く様は確かにそう見えるが、その中身は、少し自意識過剰きみの心が洋々たる未来を想像しているにちがいないのだ。陽のあたらない憂うつなこの大手門の校舎は、その中に、生活している様々な魅力をもった様々の人間で、十分に明かるい陽が降り注いでいるように思えるのである。

参考文献

表現指導の理論と実践 大矢武師・瀬戸仁編 明治書院

文章表現要説 相原林司 講談社

言葉に関する問答集4 「ことば」シリーズ9

第二部 手紙の書き方 文化庁

(大阪府立大手前高等学校校教諭)